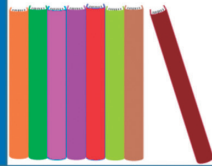


# 大人が絵本を 第24回 勇気が



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子\*

小児歯科医師 濱野 良彦\*\*

\* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)  
\*\* 医療法人元気が湧く 理事/ファウンダー

## 絵本のヒーロー

まん丸お顔に丸い鼻、まあるいほっぺたが二つ付いた子どもたちのヒーロー、アンパンマンが「アンパンチ！」をすると、子どもたちはすっかりアンパンマンになりきり、ちっちゃな手を握り締めてみなぎった力のまま、アンパンチのポーズをとります。その表情まで勇ましくなるのです。

アンパンマンは「正義と愛と勇気、友情」<sup>1)</sup>をテーマに、言わずと知られたやなせたかし氏が生み出したキャラクターです。小さな子どもと絵本との最初の関係は、リズム遊びやコミュニケーションのツールですが、耳と感覚で楽しむ時期が過ぎて形を認識できるようになると、赤ちゃんが真っ先に興味を示す形は丸なので、丸い顔の中に丸い鼻と丸い真っ赤なほっぺたがくっついたアンパンマンは、乳幼児が視覚的に興味を示す形そのものというわけなのです。8か月くらいの乳幼児がアンパンマンをじっと見ている姿をみたお母様が、「まだアンパンマンを知らないのに見てる」と不思議そうにしたり、「アンパンマンって誰もが通る道なのですか?」と尋ねられたりしますが、キャラクターのアンパンマンを見ているのではなく、丸い形状をじっと見ているのです。そして、やがてキャラクターとしてのアンパンマンが大好きになるのです。やなせ氏が知らずか、よくできたものです。

『アンパンマンと  
はみがきまん』  
やなせたかし 作・絵  
(フレール館)



アンパンマンは子どもたちに、友達との関係や正義、勇気を伝えるのに頼りがいのある、優れたヒーローなのです。

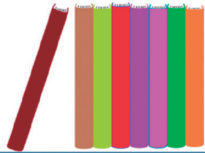
## 勇気はどこから?

子どもたちは成長過程において、勇気の必要なシーンにさまざま出くわすのですが、早々にやってくるのは病院ではないでしょうか。定期健診やワクチン接種、それから成長に付きもののケガや病気の治療で、歯科診療も同じです。期せずして口の中に器具を入れられたり、注射をされたりと、子どもにとって嫌なこと、逃げ出したい場面に必ず遭遇することになるのです。物事の分からない小さなうちは「泣く」ことで抵抗します。泣いて「イヤ」を表現し、ストレスを発散させるのです。少し大きくなると嫌なことに対して「頑張る」ようになり、病院は怖いけれど、常に痛みを伴うものではないと学んでいくうちに、嫌な時間を頑張れるようになります。成長と共に勇気を身に付け、苦手なことにも勇気を出して立ち向かっていく力を出せるようになるのです。

では、その勇気はどのようにして身に付けるのでしょうか。言葉や着衣のように身振りや形で教えるわけにはいきません。一番の方法は親の愛で、愛情をたっぷりと注がれた子どもは、受けた分だけ勇気のできるのではないのでしょうか。「お父さんお母さんが一緒だから大丈夫」、「頑張れば、お父さんお母さんが褒めてくれる、抱きしめてくれる」という思いでもって、勇気が湧いてくるのです。でも、大きくなるにつれ、勇気が必要な場面が多様に広がっていきます。さまざまな場面に対応できる不動なる力を自然に備えられるのは、やはり絵本だと言えます。絵本によって勇気を備えていけるのです。

# 手にするときは！

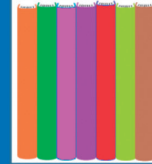
## 湧いてくる絵本



企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



### 親子の「愛と勇気」



毎日の生活の中でも、子どもがまだ小さな頃はお父さんお母さんの手を借り、力を借りてばかりいたのが、いつの間にか自分の手と力でいるんなことが出来るようになります。小さな子どもたちにとっては、毎日が勇気の連続のようなものです。

子どもも大人も生活環境の変わる春、4月、幼稚園入園を迎えたお子様が登園を嫌がる、毎朝泣いて抵抗するなどの悩み声が聞こえてくるシーズンでもあります。絵本と図鑑の親子ライブラリーでは、幼稚園の楽しいお話や、幼稚園に行きたくなくなるような絵本を尋ねられる季節です。子どもにとって、それまで一日のほとんどを一緒に過ごしたお母さんと離れて、大きな社会にデビューすることになります。幼稚園に行くことが楽しくてならない子がいれば、泣いたりぐずったりまではしなくても寂しさや不安と闘いながら勇気を振り絞っている子どもたくさんいるはず。感受性が豊かと表現できる慎重な子、用心深いお子様が、環境の変化に慣れるまでに時間がかかっているのでしょう。毎朝襲ってくる不安や寂しさと闘い、毎日毎日勇気を振り絞っている子どもたちなのですが、実は、お母様方もお子様を突き放す勇気、泣いて抵抗するわが子の背中を押す勇気を振り絞っているのです。

そんな親子に必ずおすすめしている絵本は『てのひら』で、幼稚園に馴染めない女の子の母親が、母と娘だけの秘密のおまじないマークを手のひらに描いてあげるお話です。物語のお母さんは、「子どもの手のひらに「泣きたいときには泣いてください」マークを描いてあげるのです。なんてステキなお母さんでしょう。お子様はもちろんですが、お母様へ

勇気を授ける絵本としての願いをこめて紹介しています。お母さんと二人だけの秘密のおまじないを持っていて、それは子どもが勇気を振り絞りたいときに、ぎゅーっと握りしめる手のひらの中にあるのです。子どもにとってお母さんと離れていても、つながっている気持ちになり、勇気も湧いてくるでしょう。本書を紹介したたくさんのお母様から「おまじないマークをやってみました」との報告を受け、一冊の絵本が何十組もの親子、家族へ大きな勇気を与えた煌びやかな光景を見せてもらっています。



『てのひら』  
瀧村有子 作  
ふじたひおこ 絵  
(PHP 研究所)



やなせたかし氏は「アンパンマンのマーチ」<sup>2)</sup>の歌詞「愛と勇気だけが友達さ」のくだりについて、「アンパンマンのような大きな愛は親子とか兄弟の中にもいつもある。何かを決断する時、何かをやろうとする時には必ず勇気が必要」と言い、「愛には勇ましさも含まれていて、勇気にはやさしさが含まれている」<sup>3)</sup>と論じています。毎年、春になると見受けられる親子の葛藤は、やなせ氏の名言に凝縮されているなあと思います。



### 小児歯科医院でひらく勇気

アンパンマンは、小児歯科診療と闘う子どもたちにも勇気を注いでくれています。七夕翌日の院内おはなし会の日に2歳のJくんは、『あかちゃんまんと



ねがいほしかなえぼし』を読み終える頃合いに来院しました。診療への警戒心からお母様の後をべったりとくっ付いていたのですが、警戒しながらもアンパンマン絵本が気になるようで、こちらをチラチラと見ていました。おはなし会が終わってから、Jくんに「歯をきれいにしてもらう前にアンパンマン読む？」と声をかけるとお母様とソファに座ったので、まずは七夕行事が想起できる質問をすると、お母様と一緒に「七夕さまのうた」を手遊びしながら歌ってくれました。

この時のJくんの頭の中では、歯科診療のことなど忘れ去られていたに違いありません。「アンパンマン」絵本では指差ししたり、お母様と教え合いっこしたりして楽しんでいました。アンパンマンが終わると、「次、これ」と言ってJくんが持ってきた待合室の絵本『ねないこだれだ』が2冊目です。アンパンマンだけでなく、『ねないこだれだ』にも勇気もらったJくんは診療に入りましたが、診療台では大泣きしていました。アンパンマンに勇気もらったけれど、2歳のJくんには自分の力として持続させるまでにはいきませんでした。しかし、この繰り返しが大事で、同じ絵本を何度も読むことで疑似体験を重ねながら勇気を身に付け、少しずつ力として蓄えていけるようになるのです。

Jくんとは診療後のエピソードもあります。診療で力を尽くしきって待合室に戻り私を発見すると、目と頬に涙をたっぷり残したまま「アンパンマン読む」と言ってきたので、診療前と同じ「アンパンマン」の読みあいです。この日、Jくんはアンパンマンに勇気もらって歯科診療に立ち向かいましたが、その勇気を使い果たしてしまいましたので、再び勇気の注入です。二回目のアンパンマンは、診療前に読んだときよりパワーアップした勇気となったに違いありません。診療が終わって泣き疲れたそのまま帰っていたとすると、「とても痛かった」「怖かった」という記憶だけが残り、Jくんは次回も歯科医院を

警戒し、嫌がりながら来院することになるでしょう。そうではないと確信できたのは、私の退出時、Jくん親子と医院前で会ったのですが、20m、40mと遠ざかっても「バーイバーイ！また読んでねえ」と見えなくなるまで見送り続けてくれたのです。アンパンマンに勇気と元気をもらったJくんは、次回の診療日には「勇気リンリン」<sup>3)</sup>と歯科医院に行けるのではないのでしょうか。



### 大人が勇気をもって。



ソーシャルメディアの発達や働き方の多様化、さらに物のあふれる現代において、大人に対しても「勇気を持とう」「勇気ある行動とは」などと叫ばれるようになりました。現代社会には、心の弱い部分に自我の危機を誘発させるワナがあり、一瞬の隙に大人が流されてしまう時代なのかもしれません。大人だって勇気を蓄え持続しなければ、つつい弱い心に押し潰されそうになりますが、それでは未来を生きる子どもたちのお手本にはなれません。

そんな現代社会を映し出すかのように、出版文化界では100年も前に誕生したアドラー心理学の『嫌われる勇気』(ダイヤモンド社)が2015年、ビジネス書ランキングの年間1位となって話題を広げ、今年2016年上半期ベストセラーでも1位にランクインただけでなく、続巻の『幸せになる勇気』がビジネス書3位と続き<sup>4)</sup>、アドラーブームを巻き起こしているのです。アドラー心理学でいう「勇気」とは、「困難を克服する活力」で、「困ったときや失敗したときに、より良い状態にしたり、次につなげたり頑張ったり、きちんと振り返ることができる力」と定義づけ、「困難に立ち向かう活力を補完すること、そんなエネルギーを増やしていくかわり方」を「勇気づけ」としています<sup>5)</sup>。子どもたちを支え、見守り、健全に育てる役目を担う大人自身が確固たる勇気を備えていないと、子どもたちを「勇気づけ」、子ども自身が勇気を身に付けるサポートなどできないという

ことです。

1945年に誕生したムーミン谷のスナフキンは、「本当の勇気とは自分の弱い心に打ち勝つことだよ。包み隠さず本当のことを正々堂々と言える者こそ本当の勇気のある強い者なんだ」<sup>6)</sup>とよく言うのですが、アドラーもトーベ・ヤンソンも先見の明をもち、遠い未来を見越したうえで21世紀に生きる私たちの指南となるような道標を文字に残してくれたとも受け止められます。この2人の偉人のように、今を生きる私たち大人も、未来ある子どもたちのために、そして100年先を生きるすべての人々のために真の勇気をもって、その意志を継承していかなければなりません。



## 勇気と励まし



民話研究を中心とした「お話」の魅力を広げ、また日本初の赤ちゃん絵本に着手してきた児童文学界のパイオニアである松谷みよ子氏は、「すてきなお話をきかせるということは、子どもの体の中に勇気とか、思いやりの気持ちを育てる」と言っでは「物語の世界へ子どもたちを一緒に連れて行く、一人で旅立たせる」ことが大事だと語ってきました<sup>7)</sup>。不安や困難を乗り越えていくのは、子ども自身なのですが、その勇気はお父様お母様にもらったり、物語世界にもらったり、あるいはお話を一緒に読みあう大人と共に乗り越えたりするのです。子どもたちへ強い勇気となるメッセージを発信し続けているのは、他でもない絵本なのです。

連載第24回の終わりに、老若男女すべての方へお

『勇気』  
バーナード・ウェーバー 作  
日野原重明 訳  
(ユーリーグ)



すすめたい絵本をご紹介します。プールの飛び込み台から飛び込もうとしている男の子の複雑な表情が表紙絵の、『勇気』です。この男の子がどうなったかは、ぜひ本文をご覧ください。そして、読み終わった最後に裏表紙もしっかり見てください。勇気には「励まし」も重要な要素で、子どもたちと関わる大人が励まし役になると、より勇気が湧くのだと思います。見守る励まし、共感する励まし、共に闘う励ましが小児歯科医院内で広がるきっかけとなる一冊だと言えます。

## 文献

- 1) やなせたかし 原作, 東京ムービー 作画: アンパンマン 愛・勇気・友情 (アンパンマンコミックス), フレーベル館, 東京, 2001, 167p.
- 2) やなせたかし: アンパンマンのマーチ (アンパンマンアニメギャラリー), フレーベル館, 東京, 2009.
- 3) やなせたかし: わたしが正義について語るなら (ポプラ新書), ポプラ社, 東京, 2013, p.121-127.
- 4) 日本出版販売株式会社: ベストセラー, NIPPANHPhttp://www.nippan.co.jp
- 5) アルフレッド・アドラー原著, 小倉広 解説: アルフレッド・アドラー 人生に革命が起きる100の言葉, ダイヤモンド社, 東京, 2014, No.81-92.
- 6) トーベ・ヤンソン作, 山室静, 他 訳: ムーミン童話シリーズ, 講談社, 東京, 1980~1985.
- 7) 松谷みよ子: 「語りは命の流れ」と語る児童文学作家松谷みよ子さん, 総合教育技術, 57(3): 10-15, 2002.

## 絵本

- 1) やなせたかし: アンパンマンとはみがきまん, フレーベル館, 東京, 2009.
- 2) 瀧村有子 作, ふじたひおこ 絵: てのひら, PHP研究所, 東京, 2010.
- 3) やなせたかし: あかちゃんまん と ねがいほし かなえほし (アンパンマン アニメギャラリー), フレーベル館, 東京, 2007.
- 4) せなけいこ: ねないこだれだ, 福音館書店, 東京, 1969.
- 5) バーナード・ウェーバー 作, 日野原重明 訳: 勇気, ユーリーグ, 東京, 2003.
- 6) 松谷みよ子 文, 瀬川康男 絵: いのないないばあ, 童心社, 東京, 1981.